

無政府主義の目標と戦術

—— 現下無政府主義戦線の整理に関する私見 ——

一

われわれの有する理論と戦術とにおいて、今や整理の必要が痛切に感じられるのは、もちろん、われわれの戦線の拡大と、われわれの意識の深化に基づくのだ。

二

戦線の拡大とは何か、長い期間われわれの陣営は、主として労働者に守られていた。いまや然らず、農民、婦人、植民地、水平社、知識者等、あらゆる戦線に黒旗の翻るを見るのだ。

だが、かくの如き戦線の拡大は、自主自治をモットーとするわれわれの世界にあつて、ともすれば個々分立の観を呈せしめる。

あるいは、アナルコ・サンディカリズムとなり、あるいは農民自治となるなど、この両

者において見ても、そこにはかなりの思想の違いがある。このことは婦人、植民地、水平社のそれぞれにおいてもそうである。

然し、われわれはかくの如き状態に耐えることができなくなった。

三

意識の深化とは何か。それは主として将来におけるわれわれの社会の様式に関してである。

われわれは多くの先覚者によつて、種々の様式を示された。現にわが国にあつても、ある人はごく多元的の様式（一方に組合連盟があり、他方に農村連盟があり、またその他の種々の連盟があつて、それが集まつて無政府連合社会をつくるというような）を予想しており、他の人はそれを批評して、それは大体において都市工業と村落農業との分離を意味する、そしてそうした分離（分業）は、交換の煩雑と、貨幣の再現と、従つて権力の発生を促すものだといっている。（協議の煩瑣と、委員制の固定化と、従つて権力の発生を促すことになるのだともいっている）

かくてクロボトキンの無政府共産社会（農工合同の自治コミューン連合——一つの自治共産村に農業と工業を取り入れる制度で即ち今日の社会のように都会（工業）と農村（農業））というような意味の分業制を廃止する）が、それらの人々によつて唱えられている。

さらにそれと同じ様式の社会は、農民達によつても期せずして予想されている。

かくの如き問題——われわれの住むべき、また作るべき社会の様式に関する問題は、われわれの陣営にあつて、今日までのところは曖昧にされていた。少くともその問題を取り上げて真摯に批判し、決定するといふことがなかった。理由は「将来のことは考えたつてわかるものでない。だから興味もない」というように思われたからだ。

実際われわれは将来のことに關して正確でありうるわけはない。「だからそんな問題は今から考えることはいらぬ。われわれはただ現実の戦いを戦えばいい」とは、よくブルジョアやマルキストのいうことだ。否、それらのブルジョア、マルキストの如き強権主義者こそ、そういうことは言うべきである。このことをわれわれはよく考えねばならぬ。なぜならわれわれにとつては、これは将来の問題であると共に一層現実の問題である。「いますぐに」われわれはわれわれの社会を実行に移さねばならないし、また、この問題に対する自覚こそ、われわれの戦線を整理するための唯一の基礎となるものである。

四

われわれの社会が無政府共産であらねばならぬ、農工合同の自治コミューンの連合であらねばならぬという自覚は、大部分の意味において一般的になつてゐる。無政府主義者の大部分の人は、そういう風に考えているように思われる。

然しながら、なお多分の混雑と、不徹底の状態におかれてある時に當つて、特に無政府共産主義を名のる一派の人々によつて、戦闘の火ぶたが切られたことは、うなづかるべきことだと思われる。

われわれは今この問題を慎重に批判せねばならない。そしてわれわれの目標を唯一のものにする時がいまきている。こう考えてくれば、当然われわれは、「無政府共産」社会を目標とするものであることが判然する。早くいえば農工を一つの自治コミューンに取り入れた社会——それこそわれわれを最もよく自由に生かす社会なのだ。農工分業の社会は必然に権力社会である。農村は都会によつて搾取され、大衆は権力者の踏み台にされる。かかる権力社会を永遠に地上に來たらしめないためには、「無政府共産」とよばれている様式の社会を打ち建てよりほかはない。

五

無政府共産主義を名のる一派の人が、断乎として混雑せるわれわれの思想界を対象としての戦闘を開始したことは、まことに多とすべきである。

然しながら、遺憾にもその戦闘は、今、すこぶる無意味な状態に陥つてゐる。今やそれは「無政府共産」の徹底と確立のための戦闘ではなく、それらの一派の組合運動に対する蔑視を中心とする悶着なのだ。われわれの多くの労働者達は、いまこの悶着のために精力

を浪費している。然し、もちろん、この精力浪費も、当然何らかの大きな利益を、もたらすことにはなりうる。何となれば、われわれはそこに、彼等一派の戦術（方法）方面における重大な誤謬と、それに対する多くの労働者達の、あまりにも当然な抗争を認めうるからである。

六

彼等一派——無政府共產主義を名のる一派の人々の、戦術方面における重大な誤謬とは何か。

彼らは無政府共產社会を建設する準備——基礎工事を、単に「思想」にもとめる。われわれが「思想」的に無政府共產を把握してさえいれば、来たるべき革命に際して、われわれは必ず、過去の革命におけるがように失敗することなく、直ちに無政府共產の社会を作ることが出来るというのである。従つてかく信ずる彼等にとつては、労働組合も、農民組合も、消費組合も、婦人運動も、水平運動も、植民地運動も、すべてが商取引か、でなければ、二義的のものに思われる。

だが一方労働者、農民、婦人、その他の者は、その各々の持つ個性的の運動を、単なる商取引や二義的のものとは考えず、なおかつ革命的要素を併せもつ「力」でありうるという自信を捨てない。

七

ここで私は革命の準備——基礎工事を「思想」にのみもとめることが、果して妥当なりや否やを考えて見たい。

従来の革命（フランスやロシア）が失敗に終つた重大な原因は、パンの問題からであつたといわれる。

革命時のパン不足は二つの原因に基づいている。一つは分配の遮断（交通機関の破壊と通商行為の廃止）のためであり、他は生産不振（又は拒否）のためである。ことに後者は革命を衰退せしめる恐ろしい原因である。今そのことを考えよう。

パンの生産者は農民である。農民の不断の生産があればこそ、われわれは飢えることなく生きつづけている。然しながら農民の不断の生産は、権力の圧制下に行われている。権力社会にあつては、パンの生産者農民は、最下層におし沈められ、あらゆる方法の苛酷な責苦にさらされている。

あらゆる方法——その一つは重税を課し、もし応ぜねば警察力（それで足りない時は軍隊の力）に訴えることだ。彼等権力者どもは、片手に武器を提げて、農民を生産へと駆り立てるのである。それとまた他面にあつて、彼等権力者どもは、「商業主義」を發明し、それによつて農民をひどい目にあわせる。「商業」によらなくては、即ち米を「売」らなくては、そのくらしが立たぬような仕組みにする。昔、農民はすべてのものを自分で作り

自分で費った。然し、今では酒でも煙草でも醬油でも作ることが出来ない。作れば安くつくから、たまに秘密に作るものがあると、たちまち警察の御厄介にならねばならない。なぜだろう。それは彼らが貧乏な農民をあくまでも貧乏にするために、そして都会から高い酒、煙草、醬油を、いやでも買わせるために仕組んだことである。この買ったり売ったりすること、即ち商業主義こそは権力社会を支持する。そしてそれは分業（早くいえば都会と農村における工業と農業の分離）の制度にその根を張っている。

さて、ところで革命時にあつては、そうしたあらゆる「権力の行使」が断絶する。かくて農民は「他人のための生産」をやめる。そうすると、どんな結果になるか。それは直ちに都会の住民に響く。都会の住民はその日から飢えねばならない。そしてその住民の中には革命のために戦った労働者もいれば、その他のあらゆる者がいる。

本来これらのものは、「思想」的には農民と同胞であるべきだ。にもかかわらず、飢えのために、見よ、あらゆる革命時において、都会の多くの労働者が、隊を組み、武器を携えて、百姓征伐に行ったことは誰も知る通りだ。かかる状態のもとに革命が成功するわけはない。従来革命はいつもこのパンの問題から失敗した。

だがこのことを深く考えるものは、農民の利己主義（？）も、労働者の横暴（？）も、それは単に彼らが「思想」的に目ざめていなかったからと言うより以上に、革命への基礎工事が全然に出来ていなかったことに原因をみる。

第一には彼等は極端な分業主義の社会をそのまま革命にきてしまった。故に農民と都会人（労働者とかその他の）とが革命の翌日から直ちに同じところに住むというような準備が出来てない。農村には農場のみがあつて工場がなく、都会には工場のみがあつて農場がない。かくて彼等は革命後も、なお別れて住まねばならない。その場合、パンの生産者農民は都会からきて彼等のパンを取り上げて、また都会に帰って行く奴等（それがいかに偉い革命的労働者であると自称してくるにせよ）を信ずることができない。故に両者の間には争闘が起こるが、この場合、必然に強権が発生して、都会人を保護し、農民をおさえつけることになるのは歴史的に見ても明らかだ。農民の敗北は即ち革命の敗北だ。

八

私は革命時におけるパン問題は「思想」の不備以外に、「組織」の不備にあるといった。つまり革命の基礎工事としては、「思想」とともに「組織」の準備に重きをおかねばならないのだ。

かりに今「思想」が完全に準備され、革命が混乱に陥らず、百パーセントの成績で遂行されたとする。しかも！ すぐには、農工合同の無政府共産社会を組織することは不可能なのだ。なぜかといえば、革命直後、都会の大工場を直ちに各農村へ分散せしめることは不可能である。それと等しく各都会に直ちに農場を拓くことも不可能である。結局労働者

は当分の間都会の大工場に居残り、農民は農村で当分の間農業のみをやつていく外はない。そうすると、そうした制度（分業）は即座に強権を発生する。そして革命は失敗する。（またこうした革命には、強権主義者の強く働きうるすぎがある）

九

私はいう、革命の準備と基礎を単に思想にのみとめることは夢だ！

革命の準備と基礎は、現制度の徹底的否定（新制度の出生）に待たねばならぬ。——それは第一には分業主義の否定。第二には商業主義の否定。第三には個人所有個人経営等の否定であらねばならぬ。

農村の新しい事情について、少しでも注意を払っているものは、実に右のすべての事実が、農民達の種々の運動の中に包含され、促進されつつあることを知るであらう。今、農村では、経済的の必然の事情のもとに、共同耕作、共同経営、共同所有等の必要と希望とが熟しつつある。一方彼等は消費組合、生産組合等の発達の上において、村落工業（工業を都会から取りもどす努力——日常器具、衣類、用品等の製造）を開始する要求をもち始めている。かくて、ここには、農工合同の自治コミュニティが現われかけようとしているのだ！これを助長することが、真に革命を準備し、基礎づけることになるのだ。私はそう確信する。

十

かくて農民のスローガンは「直ちに無政府共産社会へ！」であらねばならぬ。それへの着手とその生長は、必然に都会を廃止する。（都会は農村を踏み台にしてのみ出来上がっている空中楼阁なのだ）従つて権力をも！（権力は都会の上にひろがる悪気流なのだ）農民はいますぐ無政府主義に目ざめ、いますぐ無政府共産社会に突進しなければならぬ。

十一

然しながら革命の事業が、農民によつてのみなされるのではないことは、もちろん明らかである。

一方、工場とか、家庭とか、植民地とかにおける種々の争議や、組合行動は、資本主義および権力主義と直接的に闘争することによつて、革命への巨大な交響樂を奏でる。

それらの闘争は力にみちている。「破壊しろ！ 破壊しろ！ 破壊しろ！」

あらゆる小さな大きな争議、抗争、それらのすべては、パニクンの「総破壊」の意志によつてなされるべきである。都会でのかかる総破壊の力が強ければ強いほど、農村における建設の事業はそれに伴つて進展する。われわれは今やこの関係、この両者の間の有機的關係を悟らねばならぬ。

力の大きいなる一つの労働者の運動、それは無産者が政治運動に幻滅してきた今日以後、一斉にものすごく抬頭するであろう。かくて今やすべての労働者は、その無政府無支配の威力を、恣まに行使しなければならぬ。

然し、われわれはいかなる場合にも「人為的」であってはならない。サンディカリズムの運動が、ストライキのもつ力をあまりに過大に「利用」しようとしたことは、その力をかえって弱めた。

ストライキは日常時闘争（労働条件等のための）と非常時闘争（ボイコット、戦争反対、その他の意思表示のための）とを問わず、「必然のストライキ」でなくてはならない。

（党勢力拡張のためとか、政權獲得のためとかにストライキが利用された以来、常に失敗してはその力を弱めている。マルキストどもの支配する労働運動が、遂に分裂と衰退の外の何ものでもあり得ないのはこのためだ）ごく必然的の（主客観的事情において）ストライキこそ、それはいわゆる「商取引」であるだろうと共に、結果的に大きな爆弾的破壊的の力を併せもつのだ。無政府主義の労働運動は、かかる意味のもであらねばならないのだ。さらに忘れてはならないことは、その総破壊的の運動が、必ず「無政府共産社会へ！」の意識のもとに行われねばならないことだ。

その他家庭婦人の消費組合運動も、今日のようなものに対しては、私はこれをより多く破壊の力として見る。それは商業主義をボイコットする。従つて商業主義を破壊する力としてである。

しかし、その本来の理想であるところの「建設」をまっとうしようとするならば、組合の内部において「村」（農場と工場を併せもつ）の設立をはからねばならない。早くいえば組合は究極において幾つかの無政府共産村へ解消せねばならないのだ。

かくてわれわれの、共通の標語は「無政府共産社会へ」だ。われわれはこの標語が示す唯一の目標（又は意識）のもとに労働運動を、農民運動を、婦人運動を、水平運動を、植民地運動を、思想運動をと、一つの根から分れた多くの枝々のもつそれぞれの運動を、効果的に断行するのだ。

私は信じる。無政府主義革命こそは、基礎工事なしには可能でない。それに反して他の強権主義革命は、基礎工事や準備は禁物で、火事場泥棒こそ彼等の本領なのだ。一つの権力を打倒して、他の権力がそれに代ることは、「暴力」さえあればわけはないことなのだ。

無政府主義社会こそ組織の基礎工事を必要とするとは私はいつたが、その基礎工事は、われわれが意識しない間にすら、必然になされつつある。故にこのまま成行きにまかせておいても、社会は結局アナキーへと推移する。その途上の政権の盲動や、その小成功などは、単なる小さな一現象にしか過ぎない。かかる見透しをもつわれわれは、従つて本質的には少しの不安もたない。

ただかかる見透しがつけばつくほど、途上の過誤を整理し、促進する必要がある。かくて今やわれわれは、目標において、戦術において、必然に共通のものをもつべく余儀なくされてきたのだ。われわれの考えることは多端であるが、歩む道（社会の推移）はただ一つだ。そして、それが何であるかを知った時、また知ろうとする時われわれのかつて多端であつた考えも、おのずから整理されてこなければならぬのだ。

（附記、金融と産業の対立の激化、世界市場の行詰り、機械科学の驚くべき進歩等のためにも、今や必然に自給自足的経済分散の産業——等の形態へと推移するのやむなきに至りつつある。そこには断じて集権主義政治は成立しない。農村の共同化はそうした大勢の中の一つの顕著な現われである。それはブルジョア政治下にあつてすら、助長支持されねばならない。この必然に対してわれわれは深い興味をもつのである。）